

今日は労働組合と企業経営者、それぞれの会合で話をする機会があった。労使双方に対して講演するのも節操がない気がするが、自分の考えを聞いてくれるのならどこにでも行く。

印象的だったのはどちらの会合でも講演前に、司会の方がそれぞれの団体の趣旨を確認したときのことである。双方ともまったく同じように「ふるさと新潟を一緒に発展させていきましよう」と言った。

# 時々 草々

講演内容に関しては、これもどちらの団体もそろって「忌憚ないご意見をこのことだったので、講演のはじめに「勘弁してください」と正直に言

った。司会者に悪意がないのはわかっていて。しかし「ふるさと新潟」と言われた時点で、私のような県外出身者は新潟の発展に必要なとされてない

越智 敏夫 (新潟国際情報大教授)



と感じる。まるで高校の同窓会にまぎれこんだ部外者のようだ。労組や経営者団体が同窓会のように運営されているのか。以上のよ

## 「よそ者」も同じ県民

新潟のことを真剣に考える、という意見はあるだろう。しかしその意見を強く主張することは、新潟出身でない者は新潟について真剣に考えないと

いう主張も同時に意味する。つまり「よそ者」は

不要であるという主張である。他県でも同様な意見は共通して見られそうだが、そんな内向きの姿勢で地域が発展する可能性

に私は期待しない。はっきり言ってそうした姿勢は嫌いだ。

が、新潟の発展に心底から生涯をささげた人だから、かつてなく人間の移動がさかんになっていく現代である。他県出身者でも今は同じ新潟に住んでいるという理由だけで親しい関係を築くほうがはるかに人間的だろうし、そのほうが地域は発展すると思いたい。当然これは県レベルだけの話ではなく、国境を超えて新潟に

来た他県出身者との関係にもあてはまるルールである。彼は東京出身だ

おちとしお 1961年愛媛県生まれ。立教大学法学部卒。慶応大学大学院政治学博士課程修了。96年、新潟国際情報大

学講師。2006年に教授。専門は現代政治理論